

タケル

草薙剣

春日信彦

タケル皇子

5月1日（水）メーデーであり、今上天皇即位の日。元号は平成から令和へと変わった。皇居前に集まった天皇崇拝者たちは、日の丸を振りながら、天皇、皇后を祝福していたが、秘密裏に南朝方のヘブル人による陰謀が企てられていた。その陰謀とは、九州に、”ヤマト・ヘブル共和国”の建国と南朝天皇の擁立だった。神武天皇以来の天皇制を確立したのは、南朝のヘブル人だったが、第99代後亀山天皇を最後に、南朝は滅びてしまった。以後、第100代後小松天皇から第126代今上（きんじょう）天皇まで北朝の朝鮮人天皇が続いていた。だが、南朝のヘブル人たちは南朝復活を決してあきらめることはなかった。

現に、本物の”三種の神器”八咫鏡（ヤタノカガミ）・草薙剣（クサナギノツルギ）・八咫瓊勾玉（ヤサカニノマガタマ）を持っているのは、南朝であり、北朝が持っているのは、形代（かたしろ・レプリカ）に過ぎないと公言していた。また、正統南朝天皇第73世建内スクネ（タケウチノスクネ）には子供はいないということになっていたが、安徳天皇の生まれ変わりと言われる正統南朝皇子第74世建内スクネの生存をモサドは突き止めていた。そして、モサドは、九州に、第二のイスラエル国家として”ヤマト・ヘブル共和国”を建国し、初代天皇に第74世建内スクネを即位させることを決定していた。

南朝は国民を惑わす嘘を言っている、また、南朝は天皇不敬罪に当たる、と北朝は南朝を厳しく非難した。だが、北朝が本物と主張する”三種の神器”を公にできないために、南朝の発言を完全に否定できなかった。そもそも、現在、”三種の神器”を見たという生存者はいない。天皇も見ることができない。つまり、本体と形代があったとしても、”三種の神器”は見ることが許されていないわけだから、そもそも、それらを判別することは不可能なのだ。要は、”三種の神器”は、謎の神器といえた。

北朝は、”伊勢（いせ）神宮”にある八咫鏡（ヤタノカガミ）と”宮中”にある八尺瓊勾玉（ヤサカニノマガタマ）については、本物だという自信はあったが、”熱田（あつた）神宮”にある草薙剣（クサナギノツルギ）については自信がなかった。北朝は、秘密裏に、壇ノ浦（だんのうら）の戦いで第81代安徳天皇とともに深海に消えたと言われる草薙剣を今でも探していた。また、南朝の誰かが拾い上げ、隠し持っているのではないかと南朝方に探りを入れていた。北朝方は、第73世建内スクネが持っているという噂を耳にし、物取りに見せかけて家探しをしたが、結局、草薙剣を見つけ出すことはできなかった。

なぜ、突然、正統南朝皇子である第74世建内スクネは現れたのか？彼は、東京からはるか離れた九州北部の小さな孤島で密かに育てられていた。実は、正統南朝天皇第73世建内スクネの側室、平徳子（たいらとくこ）は東京で出産すると糸島市の姫島に身を隠したのだった。彼女は、草薙剣を授けられた正統南朝皇子を安徳天皇の生まれ変わり信じ、タケルと名付け、身を隠すかのような生活を送っていた。彼が11歳の時、彼女は病死したが、死の間際に、妹の近衛完子（このえさだこ）に「タケルは安徳天皇の生まれ変わりである」と告げ、正統南朝天皇を守るために、タケルを育てて欲しいと懇願した。子供に恵まれなかった完子は、快く引き受け、タケルを我が子のように育てていた。

タケルとの再会

小学6年の夏休み、タケルは、毎朝、拝殿まで階段を駆け上り、手を合わせ、”プロサッカー選手になれますように”と神様にお願いしていた。タケルが境内でリフティングをしていると、G大生の春日真人（カスガマヒト）に「君にはオーラがある」と声をかけられ、さらに、「マラドーナのような神の手を持つ選手になれる」とほめられた。うれしくなったタケルは、真人と初対面にもかかわらず意気投合した。真人は、日焼けしたタケルの顔が誰かに似ていると直感したが、その時は誰だか思い出せなかった。東京の自宅に帰った真人は、タケルの顔に似ている人はいないかと写真集の顔とスマホのタケルと見比べながら根気よく調べてみた。数日間調べてみたが、似ている人物を探し出すことができなかった。

やはり、記憶違いじゃないかと諦めかけていた時、夢に、タケルそっくりの顔がクローズアップされた。彼は、涙を流しながらタラコ唇を震わせ熱弁していた。だれだ？と思った瞬間、突然、目を覚ました真人は、記憶をたどり必死に思い出した。あ、っと声を発した時、その男性の名前を思い出した。その男性は、正統南朝天皇第73世建内スクネことS予備校の日本史講師、建内ムツタンだった。真人は、仲間のT大生ソロモンに、文集ヤタガラスの編集会議で、スマホ片手に”タケルはムツタン先生の隠し子じゃないか”また、”ムツタン先生は、第8代孝元天皇の子孫だから、精力旺盛で、あちこちに子供を作っているんじゃないか”とつい、冗談のつもりで話してしまった。すると、ソロモンは、大きくうなずき唇を右上に引き上げ、ニヤッと笑みを作った。その時、真人はソロモンがモサドであることを知る由もなく、タケルの存在が南朝の陰謀を引き起こすことになるとは夢にも思っていなかった。

真人の心に、いつしか不徳の妄想が拡大し始めていた。それは、マジ、タケルはムツタン先生の隠し子ではないか？不倫相手の子供ではないか？講義中に、ムツタン先生は子供はいないといっていた。でも、それは本妻での話。真人は、確かめずにはいられなくなった。10連休を利用してもう一度、姫島のタケルに会うことにした。5月1日（水）真人は岐志（きし）漁港11：50発の渡船”ひめしま”に乗って姫島にやってきた。渡船を降りると小道を西に向かい足早に姫島神社に向かった。予想はしていたが、境内にタケルはいなかった。早速、神社近くの家を駆けこみ、タケルの所在を尋ねた。近衛タケルの家は民宿の並びだからすぐにわかるということだった。

真人は民宿の並びの古民家の表札を確認しながら歩くことにした。古びた小さな家の”近衛（このえ）”と書かれた表札が目にとまった。真人は、玄関の扉の前に立ち、丁寧に声をかけた。「ごめんください。ごめんください」二度声をかけると、中から「ハイ」と男子の元気な声が返ってきた。しばらくすると扉が開き見覚えのある浅黒いタケルの顔が現れた。タケルの顔は、一瞬固まったが、真人の顔を思い出したのか、ニコッと笑顔を作った。「あ、あの時の」真人も笑顔であいさつした。「こんにちは。また、姫島に遊びに来たんだ。今、暇だったら、神社で遊ばないか？」一人でテレビを見ていたタケルは、遊び相手ができたことにうれしくなったのか、大きくなずいた。タケルは「行く」と返事するとくびすを返し奥に引っ込んだ。真人がちょっとだけ奥の方を覗き込んだ時、サッカーボールを右脇に抱えたタケルが、駆け足で戻ってきた。「行こうぜ」と一言いうと扉の鍵も閉めず、タケルは即座に歩き出した。真人も即座にタケルの後を追った。

タケルは鳥居の前に立つと一礼した。そして、トレーニングをするかのように、拝殿まで一気に階段を駆け上って行った。運動の苦手な真人も子供に負けては恥と必死に駆け足でタケルの後を追った。拝殿に到着した真人は、息を整え二礼二拍手をして、”タケルが皇子でありますように”と願い、一礼してタケルに振り向いた。タケルは、真人が振り向くと即座に大声を出した。「ねえ、学校のグラウンドで、サッカーやろう」タケルは笑顔を作り、真人を誘った。真人も笑顔を作り返事した。「よし、やってやろうじゃないか。ドリブルだったら、負けないからな。その前に、ちょっと、聞きたいことがあるんだ」タケルは、うなずいて返事した。「聞きたいことって？」真人は尋ねた。「タケル君は、生まれも、育ちも、姫島かい？」タケルは、元気よく返事した。「そうだ。お父さんも、お母さんも」

さらに、真人は尋ねた。「そうか。それじゃ、タケウチ、って名前、聞いたことないかな〜」タケルは、ちょっと間をおいて返事した。「タケウチね〜。ちょっとある。お母さんから聞いた」しめたと思った真人は質問を続けた。「タケウチって、タケル君の親戚？」タケルは、首をかしげて思い出すような顔で返事した。「一度、ずっと、ずっと、ず〜と前に、お母さんから聞いたんだけど、お父さんは、タケウチっていうんだって。でも、お母さんって、今のお母さんじゃないよ。亡くなったお母さん。小学5年の時に死んじゃった」真人は、タケルの父親の姓がタケウチだったことを知り、ますます興味がわいてきた。「そうか。タケウチの漢字、わかる？」タケルは、顔を左右に振った。「わかんない。ちょっと、聞いただけだったし、僕が生まれてすぐ、ポイっと、お父さん、家出したんだって」

漢字は大した問題ではない。発音はムッタン先生の姓と同じ。やはり、ムッタン先生の隠し子ではないか？もし、本当に隠し子であれば、21世紀最大のトクダネ。真人の心はワクワクしてきた。さらに、真人は質問した。「そのほかに何か、聞いてない？」タケルは、頭をかきながら話し始めた。「さっきは、姫島生まれの姫島育ち、って言ったけど、本当は、東京生まれかも？お母さんは、東京から引っ越してきた、って言ってたから」東京生まれと聞いて、ムッタン先生の子供の可能性が高くなったと真人は目を輝かせた。真人は心でつぶやいた。不倫相手の妊娠を知ったムッタン先生は、保身のために、慰謝料を支払い、墮胎をお願いした。一度は承諾した不倫相手だったが、墮胎することができず、出産を決意した。そして、東京から姿を消した彼女は、福岡の病院でタケルを出産し、身を隠すように、孤島の姫島にやってきた。意外と当たってるかも。

ムッタン先生とタケルが同姓であったことは、親子の可能性を高めたが、それだけでは、親子と断定はできない。DNA鑑定ができれば、はっきりすると思えたが、どこの機関で判定してもらえばいいのか、今すぐには思いつかなかった。とりあえず、タケルの血液型を確認することにした。「あのね～、お兄ちゃんの血液型は、B型なんだけど、タケル君は？」タケルは、即座に返事した。「僕は、A型。でも、そんなこと聞いてどうするの？何かの研究？」気まづくなった真人は、血液型の話をすることにした。「いや、血液型と性格って関係があるんだ。だから、出会った人には、血液型を聞くことにしてるんだ。小さくうなずいたタケルだったが、すぐにでもサッカーをやりたい表情を見せた。「早く、サッカーやろうよ」真人は笑顔で返事した。「よし、やろう」

姫島分校のグラウンドまで駆けてくるとタケルは、六角形の校舎の中に入っていった。しばらくして、タケルはサッカーボールをけりながらグラウンドにやってきた。「先生の許可をもらった。サー、やろう～」タケルはドリブルを始めた。真人は、ゴールキーパーをやることにした。「タケル君、僕は、ゴールキーパーだ。どこからでもいいぞ」ゴールに立っている真人を確認したタケルは、ドリブルをしながら、ゴールに向かった。ゴールから20メートルほどの距離に来るとタケルはボールをキックした。カーブしながらコーナーに向かったボールは見事ゴールした。真人は、全く手も足も出なかった。タケルのキック力からして、おそらく、毎日サッカーをやっているのではないかと思えた。大きな声でタケルをほめた。「イヤ～、まいった。カーブしてるじゃないか。すごいな～～」

ほめられたタケルは、笑顔で真人のところにかけてきた。「やった～～。シュートには、自信があるんだ。いつも、先生と練習してるから。でも、試合ができないんだ。高校生になったら、サッカー部に入る。そして、プロになる」真人はこんな孤島にも才能豊かな生徒がいることにびっくりした。足は速く、力強いキック、確かに才能があるように思えた。「大したもんだ。先生の指導がいいんだな。頑張れば、プロになれるかも？」笑顔のタケルは、ドヤ顔で返事した。「そうさ、波多江先生、ってすごいんだ。F大のサッカー部だったんだ。僕なんかと違って、強烈な弾丸キックなんだ。あ、そうだ。先生、呼んでこようか。ちょっと待ってて」タケルは、六角校舎にかけて行った。しばらくするとブルーのトレーニングウェアを着た、背の高いがっちりとした体格の30歳前後と思われる先生が駆け足でやってきた。

タケルが先生を紹介した。「体育と社会の先生。イケメンだろ～。人気者なんだ。先生、弾丸シュート、見せてあげてよ」先生は初めて見る真人の顔にちょっと怪訝そうな顔をした。先生は、確認するかのように真人に話しかけた。「分校で教えています波多江と申します。タケルのお友達ですか？」島にやってきた悪党と思われてはいけないと思い笑顔で返事した。「はい。東京から観光にやってきましたカスガマヒトと申します。タケル君と会うのは、まだ二回目なんですけど、すごく意気投合しまして、お友達になりました。よろしく願います」疑いが解けたと見えて、先生は笑顔で返事した。「そうでしたか。島の人ではないと思いましたので。失礼しました。よければ、職員室にどうぞ」

タケルが即座に口をはさんだ。「先生、シュート。弾丸シュート、見せてよ」ニコッと笑顔を作った先生は真人に顔を向けて話した。「F大のサッカー部だったんです。天皇杯にも出ました。ここでは、サッカーチームは作れませんが、タケルを指導しています。結構、筋がいいです。それじゃ、一発」先生は、ドリブルを始めた。センターから折り返した先生は、右サイドから左脚で約30メートルのキックを放った。カーブしたボールは左コーナーのポールに当たり跳ね返った。タケルは、がっかりした声を張り上げた。「あ～～、何やってんだよ～～、先生。ミスっちゃって。ア～～ア、ダメポ」先生は、頭をかきながら駆け足で戻ってきた。「イヤ～～、ミスってしまった。まあ、こういう時もあります。真人さん、どうぞ」先生は、校舎に向かって歩き出した。

波多江先生の夢

真人は先生の後姿を見つめ、密かに心の底で思った。タケルの素性について聞き出せるかもしれない。真人は、小さな職員室の入り口で一礼するとゆっくりと足を踏み入れた。「失礼します」先生は、椅子を差し出した。「どうぞ」差し出された椅子に腰かけた真人は、あたりを見渡し、タケルがいないことに気づいた。「タケルは？」先生は、即座に返事した。「タケルは練習です。タケルは本当にサッカーが好きなんです。でも、もうちょっと、勉強してもらわないと。そうでないと、糸高に入れません。困ったものです」真人は、返事に困り、質問した。「は～～、先生は、ここは長いんですか？」先生は、笑顔で返事した。「まあ、長いといえば、長いんでしょうか。大学を卒業して、最初の赴任が、ここなんです。それからずっとここです。かれこれ7年になりますか。僕は、ここが気に入っていますから、不満はありません」

7年と聞いた真人は、先生はタケルについて詳しい、と判断した。「それじゃ、タケル君をずっと教えてこられたんですね」先生は即座に返事した。「はい、サッカーを教えてきました。素質はあると思うんですが、この島では、練習が十分にできません。市内の中学校に転校できればいいのですが、家庭の事情もありますので、そうもいきません。不利な環境でも、頑張る以外ないのです。だから、できる限り、タケルの面倒を見てあげたいのです」今の話を聞いて、先生はタケルのために転勤を断っているに違いないと直感した。「僕も、タケル君は才能ある子だと思います。きっと、勉強も、やればできる子だと思います。ところで、ちょっと、お聞きしてもいいですか？」

先生は、お茶を運んでくると真人に湯飲みを手渡した。「どうぞ」湯飲みを受け取った真人は、一口すすった。先生も一口すすると、怪訝な顔つきで返事した。「何をお聞きしたいんですか？まあ、島の歴史は、そこそこ知っています。どうぞ」真人は、ちょっと気まずそうに問いかけた。「いや、お聞きしたいのは、島のことではなくて、タケル君のことなんです。タケル君のお母さんは、東京から引っ越してきたと聞きました。お答えできたらいいのですが、どなたか、タケル君を訪ねてきた人はいませんでしたか？」鋭い目つきになった先生は、問い返した。「あなたは、私立探偵ですか？どうして、そんなことを聞かれるんですか？」この質問はまずかったと反省した。即座に弁解した。「ぶしつけな質問で、申し訳ありません。というのも、タケル君は、お父さんと生き別れになっていると聞きましたもので。もしかして、お父さんが、タケル君に会いに姫島まで来たのではないか、と思った次第です」

先生は、不愉快な顔つきでしばらく黙っていた。「実を言うと、去年の秋ごろ、40歳前後の男性がやってきました。そして、タケルにちょっと会いたいというのです。素性を名乗らない男性にタケルを会わせることは、危険だと思い、きっぱりと断りました。もしかしたら、実の父親だったかもしれません。いや、タケルを探していた私立探偵だったかもしれません。真人さんは、タケルの父親を捜しているのですか？タケルに同情してですか？」真人は何と言って返事しているか戸惑ってしまった。確かに、父親を捜していたが、まだ定かでない自分の手掛かりを話すわけにはいかなかった。

真人はしばらく考えて返事した。「僕は、東京に住んでいます。できれば、タケル君の力になればと思ひまして。今も、タケル君のお父さんが東京にいるのならば、探してあげたいと思います。どれほどのことができるか、自信はないんですが。何か、お父さんについての手掛かりがあればいいのですが、タケル君は、お父さんのことは、全く知らないといっていました」先生は、お茶をすすっては、うなずいていた。「私も、できることなら、お父さんを探してあげたいと思っています。でも、手掛かりがまったくないのです。亡くなられたお母さんは、ご主人のことについて、全く話されませんでした。何か、深刻な事情でもあったのかもしれませんがね。こちらから、突っ込んで話を聞く勇気もありませんでした。タケルも心の底では、お父さんに会いたいです。不憫（ふびん）に思えてなりません」

もし、ムツタン先生が実の父親であれば、タケルに会いたいです。だが、タケルが不倫相手の子供であれば、公に、会うことはできない。そこで、タケルの写真を撮らせに私立探偵を姫島まで派遣したのかもしれない。いや、ちょっと待てよ。こうも考えられる。不倫相手は、身ごもったことを知らせず、ムツタン先生から身を隠すように、東京から姫島に逃げてきたのかもしれない。いまだ、不倫相手に未練のあるムツタン先生は、長年、私立探偵を使い彼女の所在を探していた。ついに、私立探偵は、不倫相手の所在を確認できたが、彼女はすでに死亡していた。だが、残された子供は、妹に預けられ、元気に育っていた。その子供はムツタン先生の子供かもしれない、と思った私立探偵は、学校に立ち寄り、直接会って顔つきを確認しようとした。また、彼は、タケルの写真を撮り、さらに、親子のDNA鑑定をするためにタケルの毛髪を持ち帰った。

突然、真人の頭には、いろんな妄想が膨らんだが、親子関係をはっきりさせるには、DNA鑑定が必要。タケルの毛髪を2, 3本失敬することにした。問題は、ムッタン先生の毛髪をどうやって手に入れるか？そのことは、東京に帰ってじっくり考えることにした。「ところで、先生には、感心します。遊ぶところもない、さみしい孤島で暮らせるんですから。まだ、お若いじゃないですか。デートできるような場所もないし。彼女もできないでしょ。内心では、市内の学校に移りたいんじゃないですか？」ちょっと返事に困ったような表情になった先生は、小さなため息をついて返事した。「やはり、そのように思われますか。そうですよね、何にもない孤島ですから。若者は、可能性を求めて島から出ていきます。でも、僕には・・・」先生は、何か言いたげな表情をしたが、黙ってしまった。

ちょっと気まづくなった真人は、謝罪することにした。「あ、ちょっと生意気なことを言っしまいました。学生の方で、わかったようなことを言って、申し訳ありませんでした。まだ、世間知らずなんです。環境に恵まれない孤島で頑張っているタケル君を見てると、穴があったら入りたくらいです」真人は、頭を下げた。先生は、悩みを打ち明けるかのように静かに話し始めた。「いや、真人さんが言われることは、もったもです。何も、謝ることじゃありません。この島で働くのは、僕の趣味なんです。両親からも、仲間からも、何を考えてるのやら、とからかわれています。でも、どんなにバカにされても、構いません。僕は、賭けているんです。いつかきつと、何もない孤島から、優秀なサッカー選手が出ることを。タケルには、期待しています。僕の夢ですかね～～。僕力なんか、微々たるものかもしれませんが。でも、できる限り、ここで頑張りたいのです」

真人は、先生の思いも考えず、自分勝手なことを言ったことが恥ずかしくなった。横浜生まれの、横浜育ちの自分は、恵まれない環境のことなど全く分かっていない。先生は、恵まれない環境でも、できる限りのことをやって、必死に子供達を育成している。おそらく、先生のような人は、得をすることはないかもしれない。でも、自分の思いを貫くことは、その人の人生。真人は、先生と仕事の話をするには、まだまだ、未熟だと思った。

ちょっと気まぎれになった真人は、姓と地域の歴史について話をすることにした。「話は変わりますが、ハタエという姓は、初めて聞きました。糸島には、多いのですか？」ちょっと笑顔を作った先生は、軽やかな声で話し始めた。「波多江でしょ、糸島には、多いです。おそらく、波多江の発祥は、糸島でしょう。もし他県にいたなら、きっと、故郷は、糸島ですよ」糸島には、古墳が多い。かつては、栄えていたに違いないと思った。「糸島には、世界一大きい銅鏡が出土した平原遺跡（ひらばるいせき）がありますよね。きっと、大豪族がいたんだと思うのですが、波多江家は、かつては、大豪族だったのかもしれないね」

ちょっと首をかしげて、返事した。「いや～、その点は、よくわかりませんが。波多江という地名もあるし、波多江神社があるぐらいですから、豪族だったのかもしれない。そう、波多江家には、大きな屋敷が多いのですよ。ちょっと、僕の妄想を聞いてくれますか？笑わないでくださいよ。思うに、波多江家は、源平合戦で敗れた平家落人（へいけおちうど）ではないかと思っています。平家であることを源氏に知られないように、あえて、波多江という姓に統一したのではないかと。また、波多江家の人たちは、平氏の復興を密かに願い、一致団結し協力し合って、暮らしてきたのではないかと。やはり、妄想じみてますかね」

真人は、大きくなずいた。平重盛（たいらのしげもり）の内室と千姫と福姫が隠れ住んでいたという平家落人の里・唐原（とうばる）が糸島市二丈にある。そのことから考えれば、波多江家平家落人説は、事実ってことも考えられなくもなかった。「なるほど。いや、あり得るかもしれませんよ。1185年壇ノ浦の戦いで負けて、平家は、福岡方面、対馬方面、大分方面、宮崎方面とクモが散るように逃げたわけですから。僕も歴史の妄想が大好きなんです。僕なんか、糸島こそ、邪馬台国で、平原古墳は、卑弥呼の墓だと思っています。妄想、バンザイです。心優しく、たくましい平清盛こと波多江先生ならば、きっと、姫島を天下にしらしめることができると信じています。今日は、先生と楽しいお話ができて、姫島まで足をのぼした甲斐がありました。夏休みになったら、また糸島観光をしたいと思っています。先生、頑張ってください。タケル君も、きっと先生のようなたくましい男になると思います。ちょっと、長居してしまいました。それでは失礼いたします」

姫島の噂

波多江先生とタケルとに別れを告げた真人は、静かな青い海を眺めながらのんびりと歩き始めたが、腕時計に目をやると少し焦った。出港の14時20分まで15分ほどしかなかった。ハッとした真人は、姫島港へ向かう西側の海岸沿いの小道を駆けて行った。ハ～ハ～息を切らして港に着くと、のんびりとお客を待ってる”ひめしま”の姿が、目に映り、ホッとした。すでを買っていた渡船切符を船長に手渡し、ほんの少し左右に揺れていた船に乗り込んだ。窓際の席に素早く腰掛け、姫島分校方面の青空を窓から眺めた。すると、即座に、脳裏のスクリーンに、サッカーボールをドリブルする無邪気なタケルの姿が映し出された。なぜか、ほっこりとした気分になった時、体を震わせるエンジン音が大きくなり”ひめしま”はゆっくりと動き出した。

姫島から離れるにしたがって、タケルのことが心配になってきた。単なる興味本位でタケルとムッタン先生の関係を探っていたにすぎなかったが、何か、奇妙な胸騒ぎがした。本当に、ムッタン先生の子供であれば、タケルも天皇の血を引いていることになる。昔の天皇は、子だくさんと聞いている。その子供が、子供を作るわけだから、天皇の血を引いた人は、日本中にかなりいるということになる。こう考えると、身の回りのほとんどの人とは、血縁関係があるということになり、お友達ということだ。つまり、喧嘩せず、仲良く暮らせばいい、ということじゃないだろうか。

こんな、意味のないことを考えていると岐志漁港までの乗船時間16分が、あっという間に過ぎ去った。下船すると駐車場に停めていたカーシェアのスズキソリオに乗り込んだ。早速、スマホを取り出し、ソロモンに紹介してもらったヤコブに電話した。ヤコブは、イスラエル留学生でF大生ということだった。ヤコブへの電話は、即座につながった。「こんにちは、マヒトと申します。ヤコブさんでいらっしゃいますか？」ヤコブは、真人のことをすでにソロモンから知らされていた。流ちょうな日本語で返事した。「はい、ヤコブです。マヒトさんですね。ソロモンから、あなたのことは、うかがっています。何か？」

ソロモンも日本語が流ちょうだが、ヤコブもきれいな日本語を話せることに感心した。イスラエルの留学生は、語学堪能の秀才と聞いていたが、じかに話して実感した。また、ソロモンと同じくイケメンに違いないと思った。日本語が理解できることに安心して、真人は手短かに返事した。「今、福岡観光しています。できれば、明日、お会いしたいのですが」ヤコブは、即座に返事した。「明日であれば、いつでもいいですよ。同じ留学生のイサクを紹介します」真人は、ちょっと考えて場所と時刻を伝えた。「ありがとうございます。それでは、福岡市美術館の入り口で、午前11時ということで、どうでしょう」ヤコブは、承諾の返事をした。「結構です。お会いできるのを楽しみにしています。僕とイサクは、ノッポの白人ですから、すぐにわかりますよ、ハハハハ〜」ヤコブたちは、陽気な人たちだとわかり、緊張が解けた。「それでは、よろしく」

明日の予定を立てた真人は、次に鳥羽に電話することにした。彼は、去年の夏休み、渡船”ひめしま”の船内で知り合った医学生だった。彼の姫島の実家は、すでに取り壊されて亡くなっていたが、時々、姫島分校に遊びに来ると言っていた。その後、彼とは、メル友になり、メールの情報交換でかなり親しくなった。彼は、文学にはあまり興味はないと言っていたが、なぜか、気が合った。今日から福岡観光をすることは、すでに、メールで連絡していた。また、泊めてもらえることになっていた。早速、スマホをタップした。3回の発信音が鳴ると鳥羽の声が飛び出してきた。「はい。鳥羽です。真人君ですね。もう、糸島に到着されたのですか？」真人は、これからの予定を打ち合わせることにした。「はい。姫島を観光して、今、岐志にいます。今から、会えないだろうか？」

鳥羽は、真人と食事する予定を立てていた。「いいとも。大歓迎さ。食事を一緒にしようと思っていたんだ。それと、女子を一人連れて行くけど、いいだろうか？何気に、君のことを話してしまって、そしたら、ぜひ君に会いたいわっていうんだ。看護学科の女子で、そこそこ面白い女子だし、いいかな〜？」別に構わなかったが、鳥羽の彼女なのか確認した。「僕は、構わなけど、女子って、鳥羽君の彼女？」即座に動揺したような声が返ってきた。「いや、違うんだ。単なる友達なんだけど。まあ〜、ちょっと事情があって、断りにくい相手なんだ。でも、変な女子じゃないから、適当に合わせてくれたらいいから」真人は、これ以上突っ込む気はなかった。「僕は、構わない。どこで待ち合わせようか？」鳥羽は、即座に返事した。「それじゃ、筑前深江駅の前で、4時、でどうだろう。食事の場所は、”まむしの湯”というところなんだ。駅からは、僕が案内するよ」

”まむしの湯”であれば、ナビを使えば簡単にわかる。真人は、”まむしの湯”で待ち合わせることにした。「それなら、直接、”まむしの湯”に向かうよ。まだ、3時前だから、4時に”まむしの湯”ということにしよう」鳥羽は、手間が省けたと思い、即座に返事した。「それはいい。まむしの湯、4時、そいじゃ」真人は、ナビを頼りに早めに到着することにした。ナビで確認すると、202号線沿いの福吉駅のあたりから、踏切を渡って南に1.5キロ行ったあたりに”まむしの湯”はあった。30分もあれば、十分と思い、海岸線沿いの202号線を走り、海の風景を眺めながらのんびりと行くことにした。のんびり走ったが、思ったよりも道はすいていたため、3時35分に到着した。なるべく玄関近くに止めようと空きスペースを探したが、玄関前の駐車場は、満車だった。やむなく、小川の向こうにある少し離れた第二駐車場に停めることにした。

歩く距離をなるべく短くしようと”まむしの湯”に近い北側に車を止め”正面玄関に向かった。玄関を入ると左手にお座敷の和風レストランが見えた。”まむしの湯”は全国的に有名らしく、満席状態のように見えた。右手にソファが並べてあったので、そこで待つことにした。招き猫なのか、小さなテーブルの上で丸くなった猫が、のんびりと寝ていた。4時ちょっと前に、着メロが鳴った。「はい。真人です」即座に、鳥羽の声がした。「今、駐車所に着いた。君は、今どこ？」真人は、すでに館内にいることを告げた。「もう、館内の休憩所で、テレビを見ながら、君たちを待ってるよ」鳥羽は、了解と返事した。鳥羽と美緒は、第二駐車場から玄関に小走りで行った。二人は、館内に入るとTVが設置してある右手を覗いた。真人は、鳥羽の顔を確認すると即座に立ち上がり、2人に駆け寄った。

真人は、笑顔で挨拶した。「や～～、お久しぶり」鳥羽も挨拶して、美緒を紹介した。「や～～、まったく、夏以来だからな～。こちらは、看護学科の栗原美緒（くりはらみお）さん」チビで小太りの美緒の顔を見て、ちょっと、ブルゾンちえみに似てると思った。真人も自己紹介した。「初めまして、春日真人と申します。鳥羽君とは、去年の夏に知り合って、メル友ってところですよ」美緒もちょうと上品ぶって自己紹介した。「始めまして、栗原美緒と申します。鳥羽君とは、高校からのお友達。看護師を目指しています。よろしく」鳥羽は、不安げな顔で真人に話しかけた。「早速、食事しよう。でも、今日は、多いな～。いつも多いんだが、今日は、特に多い。座れるといいんだが。ちょっと、待っていてくれ」

鳥羽は、和風レストランに向かった。隅のほうに空きがあるのを確認した鳥羽は、二人に合図した。3人が、隅の席に腰掛けるとホッとした表情の美緒は、メニューを覗いた。「あら、すごく、豪華。鳥羽君のおごりよね。どれにしようかな～～。鳥羽君、どれがおいしいの。お勧めは？」図々しいのは、承知していたが、場を考えてくれよ、と言いたかったが、真人の手前、怒りを抑えて、平然と返事した。「お勧めは、七福膳かな。僕のおごりだから、好きなのをどうぞ」美緒は、即座に返事した。「そいじゃ、鳥羽君のお勧め、七福膳にする。真人さんも、これにしたら？」真人も鳥羽のお勧めにしたが、あまりにもなれなれしい態度に面食らってしまった。

美緒は、真人の友達のごとくなれなれしく話し始めた。「真人君は、学生でしょ。どこの大学？」真人は、あまりにもなれなれしくされるのは、好きではなかったが、博多の女子はこんなものなんだろうとあまり気にしないことにした。「G大の文学部です。特に好きな作家は、松本清張かな。趣味は、旅行で、ちよくちよく小旅行をしています」美緒は、真人を見つめうなずいていた。「へ～～。文学青年か。鳥羽君とは、真逆だけど、友達ってわけか。人って、わかんないものね」鳥羽は、顔をしかめて、心でつぶやいた。やっぱ、連れてこなけりゃよかった。余計なことをべらべらしゃべって。鳥羽は、話題を変えようと彼女の話を聞いた。「彼女ができたって言ってじゃないか？芸能人でいえば、だれに似てる？」

真人は、顔を赤くして返事した。「いや、N大文学部の子なんだけど、文集ヤタガラスの仲間、話が合うってだけさ。だれに似てるって、ちょっと、広瀬すず、に似てるかも」うらやましそうに鳥羽は、返事した。「広瀬すず、似か。かわいいよな～～。真人君は、ニノみたいで、上品な顔立ちだし、モテるんだろうな～～」真人は、即座に返事した。「鳥羽君こそ、モテ、モテじゃないか」真人は、美緒に目をやった。美緒は、即座に打ち消すように返事した。「鳥羽君が～～。モテる？まさか。全然よ。だから、美緒が遊んであげてるんだから。でも、鳥羽君ね～～、密かに思っている人がいるのよ」即座に、鳥羽が口をはさんだ。「美緒が言うように、僕はモテないんだ。美緒には、いろいろお世話になっているから、感謝してるんだ」真人には、二人の関係は、ちょっと理解できない関係のように思えた。

真人は、今後の予定を話すことにした。「明日は、サークル仲間を紹介してもらったヤコブと彼の友達イサクっていう学生に会うんだ。できれば、明後日、また会えないだろうか？もっと、糸島観光をしたいし」鳥羽は、快く返事した。「いいとも、横浜ほどじゃないけど、糸島にも見どころはたくさんある。いろんなどこ、案内するよ」美緒が続けて話し始めた。「あら、美緒もヒマしてるし～～。一緒に行きたいな～～。真人さん」美緒は、真人をじろっと見つめた。真人は、ギクツと身を引いたが、蛇ににらまれているようで、断れそうにもなかった。「そうですね～。鳥羽君、みんなで観光しようか？」真人が気を使っているのはありありだったが、この場が気まずくならないように、承諾することにした。「たまにはいいかもな。美緒も糸島の名所旧跡、いろいろしってるみたいだし。いい思い出になるといいな」美緒は、笑顔で真人に話しかけた。「博多の女子も、結構イケるんだから。真人さん、いろんなどこ、案内してあげる」

鳥羽は、つい、ヤコブたちのことを話してしまった。「明日、ヤコブとイサクに会うのか。彼らは、イスラエルの留学生で、悪い人ではないと思うが、どうも理解しがたい連中だ。学生運動にも参加しているし、いったい何しに日本に来てるんだろうと思うよ。確かに秀才なのは認めるが、どうもな～～。ヤコブを紹介した友達って、ダレ？」ちょっと意外なヤコブたちの話に少し不安になった。ソロモンと彼らは、イスラエルの留学生仲間に違いないと思ったが、学生運動をやっていると聞いて、ちょっと、心配になった。真人は、集団行動をとる学生運動が嫌い、なるべく、彼らとは距離を置いていた。「まあ、ヤコブを紹介してくれたのは、ソロモンというT大生で、文集ヤタガラスの仲間なんだ。彼も文学部で、話が合うんだ。学生運動は、やってないといったが」

鳥羽は、余計なことを言ったように思えて、話を変えることにした。「いや、ヤコブたちは、みんないい人たちだ。ところで、また、姫島に行ってきたんだって。何か、面白いところでも見つけたのか？」真人は、大志を抱いた先生の話をすることにした。「今回は、学校に立ち寄って見たんだけど、体育の熱血先生に会ったよ。波多江先生といって、サッカーチームも作れない姫島で、熱心にサッカー選手を育てているんだ。姫島から、プロサッカー選手が誕生するのを夢見てるんだってさ。まったく、驚いたよ。今時、生徒のために、人生を捧げる先生がいるとは。21世紀も捨てたもんじゃないね」

鳥羽は、波多江先生と聞いて思い出した。「もしかしたら、そのサッカーを教えている波多江先生は、もう亡くなられた波多江先生の子供かもしれない。僕が小学生のころ、波多江先生、っていたんだ」うなずいた真人は、話を続けた。「なるほど。それはあり得るな～。今度、行ったとき確かめてみるよ。ところで、鳥羽君は、中学まで姫島で暮らしてたんだよな。だったら、東京から引っ越してきたという平さんって人、知らないか？」鳥羽は、頭の中でタイラ、タイラ、と繰り返してみた。10年ほど前に話題になった一家を思い出した。

鳥羽は、他人の悪口は言いたくなかったが、噂になったことを話し始めた。「いや、あまり他人の悪口は言いたくないんだけど、まあ、噂になったことを言うと。平さんって、母子家庭だったんだけど、あの母親は、ちょっと頭がおかしいんじゃないかって、みんなが言ってたんだ。というのも、意味不明というか、変なことを言ってたんだ。それが、タケルは、安徳天皇の生まれ変わりで、その印（しるし）も授かっている、とか、まあ、みんなは、相手にしてなかったけど、マジ、目が血走ってたからな～～。ちょっと、気味が悪かったよ」真人は身を乗り出して尋ねた。「その印っていうのは、どういうのだった？」鳥羽は、顔を左右に振って返事した。「それが、印があるんだったら、見せてみろ、とみんながいうと母親は、その印というのは、誰にも見せることができない、というんだ。もし見たなら、祟りがあつて、目がつぶれる、とかいうんだ。まったく、頭がおかしいとしか言いようがなかったよ」

真人は、しばらく黙り込んだ。もしかしたら、その印とは、草薙剣ではないかと思った。というのは、ムッタン先生は草薙剣を隠し持っているという冗談のような噂があった。もし、タケルが彼の実の子であれば、ムッタン先生が不倫相手に草薙剣を授けたと考えてもおかしくない。いや、もしかしたら、母親が言ってたことは、マジだったのかもしれない。ならば、その印とは、やはり、草薙剣。もしかしたら、天変地異を起こすようなことを知りえたのではないか、と思うと真人はそら恐ろしくなった。蚊帳の外に追い出されたと思った美緒は、話しに割り込んだ。「姫島に安徳天皇の生まれ変わりがいるの？一度見ていたいな～。どんな子、かわいい？」美緒は歴史に詳しいのかもと思い、真人が返事した。「今年、中学1年生になったタケルという、サッカーが大好きなイケメン。本当に、安徳天皇の生まれ変わりかも？」

鳥羽は、あきれた顔で話しに割り込んだ。「真人君、そんなことあるわけじゃないか。今の話は、聞かなかったことにしてくれ。他人に聞かれたら、笑いものになる」美緒が、ギョロっとした目で鳥羽を見つめた。「あら、何言うのよ。安徳天皇は、異母弟の後鳥羽（ごとば）天皇に天皇の座を乗っ取られたあげく、血も涙もない義経（よしつね）に、冷たい海の底に沈められたのよ。まったく、かわいそう。まだ、6歳の子供よ。死んでも、死にきれないわよ。タケルは、安徳天皇の生まれ変わだと美緒は信じるな～。一度、会ってみようかな～～タケル君に」鳥羽は顔をしかめた。やはり、安徳天皇の生まれ変わりのうわさは、話すべきでなかったと悔やんだ。

鳥羽は話を変えることにした。「そうだ、今度は、横浜観光してみようかな～。みなとみらい21、行ってみたいと思っていたんだ。真人君、案内してくれないか？」横浜観光と聞いて美緒の目は輝いた。「横浜、行きたい。鳥羽君、行こう。中華街に一度は行ってみたかったの。真人さん、案内して」こいつ、正気か？とジロツと美緒を横目で覗いた。美緒と一緒に行くとは一言も言ってないと文句を言いたかったが、そこまで強気なことは言えなかった。「まあ、真人君の都合もあるから。横浜は、まだ先の話だな」真人が即座に返事した。「いいとも。いつでもいいよ。ソロモンを紹介するよ。彼は、ちょっと理解しづらいところはあるけど、気さくで面白いやつだ。それと、文集ヤタガラスの仲間も紹介するよ。鳥羽君好みの女子がいるかも」

真人が話していると、七福膳が運ばれてきた。横浜観光の話を打ち切るにはいいタイミングだと思い、鳥羽は、食事をみんなに勧めた。「さあ、いただきます。うまそうだな～～」みんなは、手を合わせ「いただきます」と言ってお箸を手にとった。しばらく、美緒の無言が続き、鳥羽はホツとした。食事を終えると早速美緒が真人に話しかけた。「帰りに、お土産、買って行ったら。気にいったのがあれば、プレゼントするから。真人さんと友達になれて、美緒って、運がいいんだわ。桜井神社のおみくじ、中吉だったの。待ち人現る、ってあったけど、やっぱ、当たっていたんだ。真人さん、お土産、見てみようよ」

初めて会った人にプレゼントされては、申し訳ないと丁寧に断った。「いや、そう、気を使わないでください。自分で買いますから。ちゃんと、旅行のために、バイトしてますから。ほんと、いいですよ」真人の気持ちが理解できなかったのか、美緒はプレゼントの押し売りを始めた。「いいんだって、はるばるド田舎の糸島までやってきたんでしょ。あ、そう、お金のことだったら、気にしないで。こう見えても、フトコロは、あったかいのよ。さ、ほら」美緒は、立ち上がり、真人をせかした。

売店は、地元の野菜、果物、畜産物、お菓子、飲み物など品ぞろえが豊富で、糸島の思い出になるようなお土産品が並んでいた。雷山豆腐（らいざんとうふ）、七山（ななやま）たまご、黒にんにく、真人は初めて知る商品名を口にしてみた。冷蔵の品も覗いてみることにした。ゆずジャム、が真人の目に留まった。真人は、ほとんど朝食はパンだった。ジャムはイチゴ、マーマレードが好きで、ジャムを欠かすことはなかった。「僕、ゆずジャム、買います」美緒が、真人の左腕をポンとたたき、ニコッと笑顔を作り、返事した。「あ、おいしそうね。あたしも」美緒は、ゆずジャムを3個手に取るとカウンターに向かった。

真人は、糸島サイダーに目が行くと飲んでみたくなった。即座に、鳥羽に声をかけた。「サイダーおごるよ」美緒が戻ると、美緒にも声をかけた。「美緒さん、サイダーどうですか？」美緒は、笑顔で返事した。「真人君のおごり、飲みたい」真人は、糸島サイダーを3本購入し、2人にサイダービンを手渡した。真人は、招き猫に挨拶をして帰ることにした。「ちょっと、ニャ～姫にさよならして、帰ろうかな～」真人は、休憩所のテーブルでじっと目を閉じて寝ている猫の顔を覗き込んだ。疲れて熟睡しているようだったが、真人が「さよなら」と声をかけると、ちょっと間をおいて、ニャ～姫の右耳がピクピクと動いた。すると、”また、おいでやす”との返事の声が聞こえた。

謎の草薙剣

まだ、5時を過ぎたころだったが、帰ることにした。鳥羽は、美緒を女子寮に送り届けると真人を男子寮に案内した。真人は、1DKの小さな部屋に泊めてもらうのは気が引けたが、相談することもあり、無理言っただけだった。真人は胡坐（あぐら）をかくと鳥羽に声をかけた。「悪いね～。無理言っただけ。ご馳走にもなって、ほんと、申し訳ない。横浜に来たら、今度は僕がお礼をする番だ。ぜひ、泊まってくれ」改まってお礼を言われると恐縮した。「いや、こんなところだったら、いつでもいいよ。ホテルのほうが、休まるんじゃないか？真人君は、ビール飲む？」真人は、遠慮がちに返事した。「少しだったら」鳥羽は、フリッジから缶ビールを二つ取り出した。「あては、チーズしかないけど」真人もチーズが好きだった。「チーズ、最高。僕もいつもチーズさ」

鳥羽は、真人に缶ビールとアーモンドベビーチーズを手渡し、胡坐をかいた。「姫島に、今回も行ってみたんだけど、見るところと言えば、野村望東尼（のむらもとに）ぐらいだし、ほかに、何か気にいったところでも？」タケルについてどこまで話すべきか悩んだが、鳥羽が話した安徳天皇のうわさと絡めて話すことにした。「何とか、分校に立ち寄ったと話したと思うけど、去年の夏、姫島に行った時、タケルという子と友達になったんだ。それが、奇遇にも、タケルが、僕が知ってる男性にそっくりなんだ。だもんで、なんとなく、親子じゃないかと思い、それで、ちょっと気になって、今回も会いに行ったんだ。タケルに、お父さんについて聞いてみたところ、そしたら、タケルの話では、小さいときに、お父さんと生き別れになったというんだ。それで、父親を探してあげようかと」

一呼吸置いた真人は、ちょっと考え込んだ。鳥羽が、話を促した。「なるほど、それで」右座をポンと叩いた真人は、お父さん探しについて相談することにした。「ちょっと、鳥羽君の意見を聞きたいんだ。あくまでも、憶測に過ぎないんだけど、僕の知ってる男性が、タケルのお父さんではないかと思ってるんだ。DNA鑑定すれば、はっきりするとは思うんだが、そんな、余計なことをすべきかどうか迷っているんだ。鳥羽君は、どう思う？」お父さん探しの相談をされても、どう、応えていいか戸惑ってしまった。こういうプライベートなことは、本人の意向を十分確認しないと後でトラブルを招くのではないかと思えた。単なるおせっかいであれば、やるべきではないと思えた。

鳥羽は、プライベートに関する問題だと思い、慎重に返答した。「そういうプライベートなことを僕に相談されても、うまく答えられないけど、大切なことは、本人の気持ちを確認することじゃないかと思う。タケルが探してほしいというのであれば、人助けにはなると思うけど、お父さんはどうなのかが問題だ。お父さんも子供を探しているのであれば、いいけど。やはり、双方の気持ちの確認が必要だと思う」鳥羽に言われて、なるほどと思った。興味本位に考えていた自分を反省した。「確かに、鳥羽君の言うとおりで。僕の考えは、浅はかだった。人探しだからといって、人のためになるとは限らない。やはり、やめておくべきだろうな」

真人は、重要なことを話していないことに気づいた。今の両親は、実の両親でないことだ。育ての両親にしてみれば、実の父親が現れることは、迷惑に違いない。このことを考えれば、人助けどころか、家庭を破壊することになってしまうかもしれない。浅はかだった自分が恥ずかしくなった。「やっぱ、やめとくよ。人助けだと思っていたけど、それは、自己満足だったよ。実を言うと、今のタケルの両親は、実の両親じゃないんだ。万が一、実の父親が現れてでもしたら、大変なことになってしまう。こんなことも考えず、人助けだと思っていたなんて、本当に、バカだった」鳥羽もうなずいた。「人助けと思えたことが、逆に、人を不幸にすることも。僕も、やらないほうがいいと思う」

確かに、タケルは実の父親に会いたいはず。また、たとえ、深い事情があつて子供を捨てたとしても、子供に会いたくない父親はいないはず。でも、いったん捨てたからには、父親を名乗ることはできないはず。仮に、ムツタン先生が、タケルの実の父親だとすれば、タケルは不倫相手に産ませた子だ。家庭のことを考えれば、不倫の子を公にできるはずがない。いや、もしかしたら、ムツタン先生は、タケルのことを知っているかも。不倫相手とは、連絡を取っていたと考えてもおかしくない。いずれにしても、タケルは、公の場に出ることができない不憫な子ということだ。やはり、タケルは、実の父親を知らないほうが幸せかもしれない。

深刻な顔で悩む真人を見かねて声をかけた。「そんなに、悩むということは、父親に心当たりがあるということだな。たとえ、親子関係が分かったとしても、本人には知らせないほうがいいと思うな。知ることが、逆に、不幸を招くことがある」真人は、事実を知りたいという願望はあるが、いったん知ってしまえば、自分までもが不幸になってしまうような気がした。また、それとは別の心配が心に浮かんだ。タケルが、ムツタン先生の子だとして、あの時、僕以外にタケルを訪ねてきた男性がいたと波多江先生は言っていた。その男性は、どんな目的で調査していたのか？ムツタン先生以外の何者かが調査を依頼していたのなら、記事のネタにするつもりなのか？それとも、ゆすりのネタにするつもりなのか？

いや、ムツタン先生のスキャンダルなんか、それほどメリットはないはず。ならば、なぜ、ムツタン先生の身边を調査するのか？そうだ、ムツタン先生が持っているという本物の草薙剣を探しているに違いない。北朝の連中は、血眼になって本物の草薙剣を探しているという噂がある。南朝から本物を取り返そうとしているに違いない。すでに、タケルの存在が、北朝方にしれているのなら、タケルの身が危ないということになる。タケルを守らねば。鳥羽のうわさ話を検証することにした。「鳥羽君、まむしの湯で話していた、安徳天皇の生まれ変わりとかいううわさ話なんだけど、その印があるって言ってたよね、でも、だれも見ることができなかった。今から話すことは、あくまでも、僕の憶測であって、だれにも言わないでほしいんだけど、約束してくれるか？」

鳥羽は、いったいどんなことだろうかと首をかしげたが、真人の真剣なまなざしから重要な話であることは推測できた。「ああ、いいとも。男と男の約束だ。決して他言しない」大きくうなずいた真人は、自分の考えを話す決心を固めた。「僕は、タケルの父親ではないかという男性を知っている。もし、その男性がタケルの父親だと仮定すると、鳥羽君がうわさに聞いた、タケルが安徳天皇の生まれ変わりだという”印”が何であるかの推測がつくんだ。その印というのが、とても口では言えないような恐ろしいものなんだ」真人は、その印が何であるか、あまりの恐怖に話すことができなかった。その印が草薙剣であれば、タケルだけでなく、タケルの家族も危険にさらされることになるに違いない。今、この場で、こんな恐ろしいことを知る必要もない第三者の鳥羽君に、話していいものだろうか？

青ざめた真人の顔を見ていると、悩みを一人で抱え込んで、うつ病になってしまうのではないかと、少し心配になった。笑顔が無理に作って話を促した。「そう、一人で悩むことはないさ。悩みというものは、他人に話せば、解決することがある。言ってみろよ。僕のことは、気にしないでくれ。さあ」真人は、鳥羽の強さを信じて話すことにした。「わかった。話す。鳥羽君、決して恨まないでくれ。その印というのは、謎の草薙剣だ。間違いない」草薙剣といわれても、まったく、ピンとこなかった。三種の神器の一つであることは、知っていたが、草薙剣は、姫島にあるはずがない。草薙剣は、愛知県の熱田神宮に奉斎（ほうさい）されていると聞いている。いや、そうか、壇ノ浦の戦いするとき、安徳天皇と一緒に海の底に沈んだのだった。それなら、絶対に姫島なんかにあるはずがない。いったいどういうことだかさっぱり理解できなかった。

鳥羽は、全く理解できないというような顔付きで真人に尋ねた。「それは、いくらなんでも、あり得ないだろう。草薙剣が姫島にあるはずがない。歴史のことは詳しくないけど、草薙剣が熱田神宮に奉斎されていることぐらいは知ってる。まあ、いまだ、海の底に眠っているという人もいるらしいが、いずれにしても、姫島にあるってことは、あり得ない。真人君の思い違いだ」今、ムツタン先生が草薙剣を持っていると話しても、おそらく、だれも信じないだろう。問題は、北朝が草薙剣を取り返そうとしていることだ。そうならば、タケルの家族が危ない。悪い方向に考えれば、泥沼に陥ってしまう。「そうだよな。きっと、僕の思い違いだろう。それでいいんだ。思い違いであってほしい。そうでないと、タケルも家族も不幸になる」真人は、黙り込んでしまった。

さらに暗い顔になった真人の顔を見て、ますます、心配になった。「草薙剣と不幸とどんな関係があるんだ。草薙剣が熱田神宮にあらうが、海の底にあらうが、だれも困まらない。不幸にもならない。天皇だって、ピンピン、してるじゃないか。何を悩んでいるんだ。思っていることを、この際、ぶちまけろよ。僕が、解決してやるからさ」真人は、自分ひとりで悩んでいることがバカバカしくなった。あくまでも、仮定の話でしかない。鳥羽君であれば、笑って聞いてくれるような気がして、話す気になった。「そうだよな。草薙剣がどこにあらうが、我々、一般庶民には関係ないことだ。僕の妄想を話すよ。まあ、笑わないで聞いてくれ」真人は、一呼吸おいて、鳥羽を見つめた。

鳥羽は、最近面白い話がなくて退屈していたため、なんとなく、ワクワクしてきた。「さあ、話してくれ」真人は、なるべくわかりやすいように順序だてて話すことにした。「草薙剣は三種の神器の一つだ。それが、愛知県の熱田神宮に奉斎されていることも知られている。また、海の底に眠っているという人もいる。でも、南朝天皇を祖先とする男性が持っているという噂もあるんだ。その男性を僕は知っている。仮にだよ、その男性が本当に草薙剣を持っていたとしよう。そして、タケルがその男性の実の子だとする。そう考えると、その男性は、自分が死んだときのことを考えて、タケルに草薙剣を残すと思うんだ。ただ、タケルはまだ、子供だ。だから、今のところ、タケルには、その所在を知らせてないと思うけど」

真人は、一呼吸おいて、南朝と北朝の対立について話し始めた。「日本史で南朝と北朝について習っただろ。南朝は、第99代後亀山天皇までで、第100代後小松天皇からは、北朝だ。これで、問題が解決しているようだけど、実は、そうじゃないんだ。いまだ、南朝と北朝は、対立しているんだ。南朝は、陰では、北朝天皇は偽物で、南朝天皇こそが、本物だといっている。そこでだ、草薙剣が大きな問題となっている。壇ノ浦の戦いで草薙剣は海底に沈んでしまい、いまだ、見つかっていない。だから、北朝はこの点が最大の弱点なんだ。だから、必死になって、今でも、海底に沈んだ草薙剣を探しているんだ。ところが、いまだ発見されていないはずの草薙剣を持っている男性がいるという噂が、ここ最近、流れたんだ。その男性というのが、僕が知っている男性なんだ」これからが特に重要な話になると思い、一呼吸おいた。

鳥羽は、身を乗り出して聞き入っていた。だんだん、面白くなって、興奮し始めた。鳥羽は、ニコッと笑顔を作って、話を促した。「ほ～～、それで」真人は、ゆっくりと話し始めた。「その男性が、草薙剣をもっているという噂が流れたために、北朝は、彼の家を物取りに見せかけて、家探しまでした。今、その男性に実の子がいることを知れば、北朝は、どう思うか？ きっと、実の子が草薙剣を持っていると考えるはず。ならば、北朝は、タケルとその家族の調査を始めるに違いない」真人は、鳥羽の反応を見た。鳥羽は、話の流れはつかめた。だが、いったい、どこが問題なのかわからなかった。タケルもその家族も、草薙剣のことを尋ねられたならば、知らない、と答えればいいと思った。

鳥羽は、自分の考えを述べた。「まったく問題ないんじゃないか。北朝の好きなようにやらせればいいさ。我々、庶民が考える問題じゃない。ほっとけばいいさ。真人君は、考えすぎなんだ。僕は、そう思うけどな」鳥羽のように、簡単にかたづけられれば、真人も楽だった。でも、真人の性格では、そうはいかなかった。タケルたちが知らないといったからといって、そう簡単に、北朝が引き下がるとは思えなかった。タケルを人質にとって、ムツタン先生を脅迫するのではないかと心配した。「確かに、鳥羽君が言うように、我々庶民には、関係ないこと。悪い方向に考えれば、きりはないが、やはり、タケルのことが心配なんだ。どうも、僕の性格では、スパッと、切り捨てられないんだ」

鳥羽は小さくうなずいた。真人の心配は、わかったが、心配を始めれば、きりがない。鳥羽には、北朝が、悪質なことをするとは思えなかった。「真人君、僕は、取り越し苦労だと思うよ。北朝だって、草薙剣を取り返したいとは思ってるだろうが、子供に危害を加えるような悪質なことはしないと思うよ。今のところ、タケルの身に何か起きてるわけじゃないんだろ。万が一、タケルの身になにか危険が及ぶようであれば、守ってあげればいいと思うが」真人は、うなずくだけだった。今のところ、事件が起きているわけではない。北朝を疑えばきりがない。真人は、北朝を信じることにした。「そうだな。鳥羽君が言うとおりのことだ。心配しすぎだな」真人は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

鳥羽が、励ますように声をかけた。「そうだ、分校は、僕の母校だ。1月に1回、先輩として、タケルの様子を見に行ってみよう。そうすれば、真人君も安心だろ」真人は、パッと笑顔を作った。「そうだな。それはいい。ありがとう」感謝されるほどのことではないと思い、照れ臭くなった。「僕は、母校に行って、後輩たちと遊んであげたいだけだ。タケルの練習相手をやってあげよう。なんてことはないさ」真人の胸につかえていたモヤモヤがスパッと消え去ったような気がした。思い切って、鳥羽君に相談して、よかったよ。これで、安心して、東京に帰れる。僕は、どうも北朝が信用できなかつたんだ。でも、鳥羽君が、南朝の味方に付いてくれると聞いて、勇気が出た」

鳥羽は、南朝の味方になった覚えはないが、真人の味方になってあげたことは確かだった。でも、真人が南朝に肩入れするのが、滑稽でならなかった。天皇は、国民の象徴であって、一般庶民にとっては、ほとんど関係ない。天皇が、南朝であろうが、北朝であろうが、どうでもいいこと。三種の神器も、本物であろうが、偽物であろうが、どうでもいい。そもそも、だれも見ることができない代物を崇め奉ってるんだから、国民はのんきなものだ。真人は、本物の草薙剣を持つてる男性を知っているとあったが、彼は、おそらく、南朝方の皇族の一人に違いない。でも、彼は海底から草薙剣を引き上げたのだろうか？それは、どうも信じ難い。つまり、南朝も、北朝も、自分が持っているものが本物と言い張っているにすぎない。

いや、安易な断定はよくない。もうちょっと、考えてみよう。宮中にある八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）は本物。これについては異論はない。伊勢神宮に奉斎されている八咫鏡（やたのかがみ）はどうか？ほぼ本物のようだが、形代（かたしろ）の可能性は残っている。というのは、伊勢神宮は火災にあっているからだ。八咫鏡は無事だったということになっているが、果たしてそうだろうか？火事場泥棒というのがある。つまり、火災のどさくさにまぎれて、本物と形代をすり替えることは可能だったはず。もし、すり替えられていたら、伊勢神宮の八咫鏡は形代ということになる。熱田神宮に奉斎されている草薙剣はどうか？なんと、熱田神宮も火災にあっている。となれば、上記のように、草薙剣においても、本物と形代がすり替えられた可能性がある。仮に、南朝によって、火災時にすり替えが行われていたとすれば、南朝が、本物の草薙剣と八咫鏡を持っている可能性はある。

真人は、南朝皇族の血を引いているのかもしれないが、そもそも、天皇ではないのだから、南朝と北朝の対立にかかわる必要はないわけだ。「ところで、真人君は、南朝に肩入れしてるみたいだが、南朝方の皇族なのか？」真人は、苦笑いしながら返事した。「春日家は、第30代敏達（びだつ）天皇の子孫なんだ。南朝が滅びるまでは、南朝方の皇族だった。でも、今では、春日家は、完全に滅びている。だから、草薙剣を南朝が持っているようが、北朝が持っているようが、構わないんだが、ちょっと、タケルのことが心配になったってこと。鳥羽君の意見を聞かせてもらって、頭がスッキリしたよ」真人の南朝と北朝の話が聞かされて、つくづく真人は靈感が強いと実感した。もしかしたら、古墳時代からの遺伝子を引き継ぎ、時空の旅をしているのではないかと思ってしまった。とにかく、真人の顔色が戻ってホッとした。

モサド留学生

5月2日（木）、真人の夢に、光り輝く天照大御神が現れるとパチッと目が覚めた。首をひねって枕元の時計を見ると7時の表示が目に入った。鳥羽は、まだ眠っていたかに思えたが、寝坊したかのように、ヒョいと体を起こし、スッと立ち上がった。真人もあわてて起き上がった。鳥羽は、ジーンズに着替えると部屋の中央に、小さな折り畳み式テーブルをセットした。フリッジのドアを開くと納豆、ゆずジャム、豆乳パック、を取り出し、素早く並べた。そして、手際よく、フライパンにごま油をたらし、パチッと卵のカラを割り、ポトンと落とした。ちょっと水を入れて蓋をし、半熟に焼きあがると、お皿に盛った。次に、シンク下の食パンを取り出し、真人にホイッと放り投げ、グラス2個を手にするのとドスンと腰を下ろし、声をかけた。「よっしゃ～、できた。真人君、食べよう。パンは、好きなだけどうぞ」真人は、手際のいい鳥羽を見て目を丸くした。「鳥羽君、君は、コックのバイトをやってるのか？信じられない。スゴイの一言だ」

鳥羽は、母親がいなかったために、子供のころから料理をしていた。自炊は、お手の物だった。鳥羽は、照れくさそうに返事した。「いや、子供のころからやってるから、慣れてるだけだ。こんなのは、簡単なほうさ。あ、豆乳は飲める？飲めなかったら、牛乳出すけど」真人は、豆乳を飲んだことがなかったが、この機会に飲んでみることにした。「豆乳は飲んだことはないけど、飲んでみるよ。鳥羽君が飲んでいるということは、体にいいということだろうから。このゆずジャム、まむしの湯で買ったヤツだね」真人は、早速、ゆずジャムをパンにぬった。鳥羽も素早くジャムをぬってパクついた。真人が、ニコッと笑顔を作った。「まいう～～」

早食いの鳥羽は、食パンをパクパク食って、豆乳をグイグイ飲んだ。目玉焼きを二口で食べ終わると、納豆パックの蓋を開き、からしとしょうゆの封を切って、ピュツ、ピュツと絞り出した。お箸で大粒の納豆をゴリゴリかき混ぜ、大きな口を開き、ホイホイ、口の中にかき込んだ。真人は、鳥羽の早食いに唖然とした。真人が食パンを半分ほど食べたころには、すでに食パンも目玉焼きも食べ終わっていた。「鳥羽君、ちょっと、速すぎじゃないか？出立は、9時だし。そう、焦らなくても」鳥羽は、ニコッと笑顔を見せて、返事した。「いや、別に、急いでいるんじゃない。いつもの、早食い。気にしないでくれ」真人が食事を終わると鳥羽は食器を片付け始め、洗い場で食器を洗い始めた。

素早く、食器を洗い終えた鳥羽は、テーブルに戻ってきた。真人が腕時計を見るとまだ8時前だった。まだ時間があると思い、鳥羽に話しかけた。「今日、ヤコブと会うんだけど、彼を紹介してくれたソロモンが言ってたんだが、今後、イスラエルの留学生や研究者たちが、九州でベンチャー企業を設立するらしい。そのことについて、鳥羽君は、何か聞いてなか？」イサクは、確かそのようなことを言っていたような気もした。「そうだな～、ヤコブとイサクは、なぜか、学生運動に熱心なんだ。それと、僕の先輩に九学連会長の安田というのがあるんだけど、彼らは、安田とも、とても親しくしているんだ。僕は、どうも彼らの考えが理解できないし、好きになれない。それと、ここだけの話だけど、彼ら、イケメンだろ。あちこちでナンパして、かなり遊んでいるという噂なんだ。いったい、日本に何しに来てんだか。あ、ベンチャー企業のことだったな。そう、将来、九州に、ベンチャー企業を作って、イスラエル人労働者を移住させる計画があるとか。そんなようなことをイサクは言ってたような」

話を聞いていると彼ら3人は、同じ目的をもって日本にやってきているように思えた。ソロモンは、文集ヤタガラスで知り合って親しくなったにすぎず、文学のこと以外話したことがなかった。彼については、T大の文学部の学生ということぐらいで、日ごろどんな活動をしているか知らない。もしかすると、彼も学生運動をやっているのかもしれない。そうだ、仲間は、彼ら3人ではないはず。もっと、ほかの大学にもいるに違いない。腕時計で時刻を確認した真人は、マジな顔つきで鳥羽にお礼を言った。「泊めてもらったうえに、朝食までご馳走になって、ありがとう。ぜひ、今度は、横浜に遊びに来てくれ。もう、9時前だから、出ることにするよ」

ヤコブとの約束時間は11時だったが、渋滞を予想して早めに出立することにした。早めに到着すれば、約束の時刻まで大濠（おおほり）公園を散策することにした。鳥羽に玄関で別れを告げると、駐車場のソリオに向かった。乗り込むと早速、ナビを設定し、福岡市美術館までのルートを確認した。目的地は、バイパス202号線から続く国体道路の美術館前交差点を北に入ったところにあることが分かった。美術館の南側に専用駐車場があることも分かった。心で、”交通事故にあいませぬように”とお願いするとゆっくりとアクセルを踏み込んだ。パネルの時計は9時05分を表示していた。

バイパスに出ると、やはり渋滞していた。今宿あたりまでが特に渋滞が激しかった。今宿を通り過ぎると、渋滞は解消された。1時間半は、かかると予想していたが、10時15分に福岡市美術館専用駐車場に入庫できた。東京では考えられない1時間200円というリーズナブルな料金にニンマリした。車を降りた真人は、パーキングの南側にあるNHK福岡放送局をちよつとの覗いてみることにした。国体道路を渡って、館内に入るとイベントの案内が掲示されていた。自由に見学ができるらしく、子供達も見学していた。ゆっくり見学できそうもないと思い、再び、国体道路を渡り、美術館に向かう小道を歩き始めた。その小道の左手に、大濠公園日本庭園が見えた。

まだ、約束の時刻まで30分はあったので、大濠公園外周路の東側を歩いてみることにした。ゆっくり歩いていると、外周をランニングする人たちに追い越された。外周は、約2キロはあるということで、ゆっくり一周歩くと30分はかかると思い、舞鶴公園西広場に到着すると、すぐに引き返した。美術館入口に近づくと入口南側に背の高い外人が2人立っていた。真人は、ヤコブとイサクに違いないと思い、二人に向かって手をあげてみた。2人は、即座に真人だと判断したらしく、声をかけてきた。「ヤコブです。マヒトさんですか？」真人も即座に返事した。「はい、真人です」ヤコブは、右隣のイサクを紹介した。「こちらは、同じ留学生のイサクです」イサクが挨拶しながら、手を差し伸べてきた。「イサクです。よろしく」次に、ヤコブも手を差し伸べてきた。

真人は、2人と握手しを交わし、予定を確認した。「これから、美術館を見学しますか？」ヤコブは、少し考えて、返事した。「ちょっと早いですが、食事をしませんか？食事しながら、お話をいたしましょう。2階にレストランがあります。どうですか？」真人もゆっくり腰を据えって、話をしたかった。3人は、美術館の入口に向かった。エレベーターで2階に上がるとレストラン”プルヌス”が左手に見えた。大濠公園が一望できる窓際の席に案内された3人は、笑顔を見せ窓を覗いた。「マヒトさん、私のおごりです。どうぞ、」ヤコブは、真人にメニューを差し出した。昨日は、鳥羽におごってもらい、今日は、ヤコブにおごってもらうという幸運が続き、なんだか、一年分の幸運を手にしたような心持になった。「はい、それではお言葉に甘えまして。僕は、パスタセットにします」ヤコブは、イサクに声をかけた。「イサクは？」イサクは、ちらっとメニューを覗き、真人と同じものを注文した。「僕も、パスタセット」ヤコブは、パスタセットを3つ注文した。

ヤコブは、注文すると早速、話しかけてきた。「マヒトさん、休みの日には、小旅行をされるそうですね。特に、名所旧跡を見て回られているとか。昨日はどちらに？」真人は、ヤコブたちの情報網に驚いた。真人についての情報は、ほとんど流れていると予想された。でも、それほど警戒することはないと思い、ざつぱらんに話すことにした。「昨日は、姫島の分校に立ち寄って来ました。去年の夏休み、友達になったタケルというサッカー少年がいて、今回も会いに行っただんです。それと、かわいい家猫、ノラ猫たちが、観光客を歓迎してくれるんです。姫島、いかれたことありますか？」

ヤコブは即座に返事した。「いや、行ったことがありません。な～、イサク」イサクもうなずいた。「行ったことがありません。ぜひ、一度行ってみます。特に、名所はありますか？」真人は、外人にはわかりにくいとは思ったが、野村望東尼（のむらもとに）の流刑について教えることにした。「そうですね、特筆するものといえば、野村望東尼が幽閉されていた獄舎があります。彼女は、幕末、勤王志士を平尾山荘にかくまった罪で、姫島に流刑になったのです。詳しいことは、調べてみてください。それと、豊玉姫命（とよたまひめのみこと）が祀られている姫島神社から玄界灘が一望でき、チョ～絶景です」

イサクは、法学が専門だったが、歴史にも関心があった。留学中に名所旧跡を巡りたいとかねがね思っていた。「はい、わかりました。真人さんは、日本史が専門なのですか？」真人はちょっと笑顔を作り返事した。「いえ、専門は、近代文学です。神社仏閣、名所旧跡を旅するのが、好きなだけです。それほど、歴史に詳しいわけではありません」ヤコブは、全く文学には興味がなかった。文学では、戦争には勝てないと思っていた。ヤコブは、真人がユダヤ人のことをどのように思っているか打診してみた。「真人さんは、歴史に詳しいようですが、ユダヤ人のことをどう思われますか？」真人は、もともと、イヤな質問だと思った。ユダヤ教に影響を受けた文学について学ぶことはあったが、民俗学的なユダヤ人についての知識はなかった。「特に、ユダヤ人の知識はありません。日本人は、ユダヤ人、イスラエル人について、よく知らない人が多いのです。申し訳ありません」

ヤコブは、ユダヤ人の話を続けた。「今、日ユ同祖論というのをご存知ですか？日本人とユダヤ人は、祖先が同じだという考えです。DNA解析では、日本人とユダヤ人は、かなり似ているといわれています。興味深い話です。我々は、日本と友好関係を結びたいと思っています。4月から、入管法が改正されました。とても素晴らしいことです。この機を逃すことなく、多くのイスラエル人労働者の移住を推進し、将来、九州にイスラエル地区を作りたいと計画しています。その時は、ぜひ、協力していただきたいと思います」真人は、突然、政治に関することを言われ、返事に詰まった。イサクは、ちよつと顔をしかめた。「ヤコブ、真人さんは、福岡観光に来られたんだ。旅の話をしたらどうだ」

わざとらしく我に返ったような顔をして、ヤコブは話を進めた。「あ、そうでした。つい、余計なことを口走ってしまって。そうだ、5月から、令和ですね。元号があるのは、日本だけでしょう。何か、新鮮さがあるって、いいじゃないですか。やはり、天皇制があるというのは、うらやましいです。ご存知でしたか、日本の天皇は、ヘブル人だったってこと。南朝が滅びてからは、北朝方の朝鮮人が天皇になってしまいました。でも、安心してください。イスラエルが朝鮮人から日本を取り返して見せますから。そのためにも、いや、また、変な話になってしまった。どうしてこうなんだろ〜。悪い癖だ。そう、日本には、神社とお寺が仲良く手をつないでいると聞きました。これは、”和をもって貴しとなす”ですね。実に素晴らしい、日本とイスラエルも手をつないで頑張りましょう」いったい何をわめいているだろうと思った。鳥羽が、彼らを嫌っている理由が、はっきりわかった。

イサクも呆れた顔で、話しに割り込んできた。「気を悪くしないでください。ヤコブは、文学が苦手なんです。すぐ、政治経済の話になってしまうんです。ところで、これからの予定は？」真人は、特に予定していなかった。早めに彼らと別れたら、御朱印をもらいに、大宰府天満宮に行くことにしていた。「特に、決めていません。いつも、行き当たりばったりなんです。そのほうが、意外と面白いのです。もし、時間があれば、太宰府天満宮に行きたいとは思っていますが」イサクは、真人を味方につけたいと思っていた。というのも、ソロモンから、彼は敏達天皇の子孫で、南朝天皇正統説の信奉者だと聞いていたからだ。「そうですか、ところで、今日の宿泊先は、決められていますか？」真人は、博多駅近くのビジネスホテルを予定していたが、まだ、決めてはいなかった。「ビジネスホテルにしようかなと思ってはいるんですが、まだ」

イサクがニコツと笑顔で返事した。「それでは、私のマンションにお泊りください。2LDKですから、全く問題はありません。ぜひ、そうしてください。ソロモンからも、お願いされているんです」宿泊代が浮くと思うとうれしかった。この際、好意に甘えることにした。「いや、本当ですか。それは、助かります。ホテル探しも、ひと苦労なんです」イサクが、笑顔で話を続けた。「それじゃ、食事が終われば、我々も、太宰府天満宮にご一緒しましょう。な～、ヤコブ」ヤコブは笑顔でうなずいた。真人を仲間に引き込みたいとヤコブも思っていた。ちょうどタイミングよく、パスタが運び込まれてきた。パスタを見たヤコブが、つぶやいた。「シーフードパスタか。うまそうだな～」イサクは、真人に声をかけた。「さあ、いただきますよう」

食事を終わると、3人は、車を停めていた福岡市美術館専用駐車場に向かった。専用駐車場は料金が安いということで、ソリオはこの駐車場に置き、真人は、ヤコブの車に同乗させてもらうことにした。ヤコブに案内された車は、留学生の自家用車とは思えない高級車、ベンツS550。ビックリした真人はヤコブに尋ねた。「このベンツ、ヤコブの？」ヤコブは、苦笑いしながら、返事した。「そうだといいんだけどね。この車、知り合い車。連休の間、借りたのさ。さあ、乗って」高級ベンツを貸してくれるような知り合いとは、いったいどんな知り合いだろうと思った。彼も、ヤコブたちの仲間なのだろうか？ヤコブたちの仲間のことを考えるとちょっと気味が悪くなった。ベンツS550は、都市高速の豊JCTに向かって、国体道路を博多駅方面に走った。